

研 究

子育て期の母親の育児行動に対する 基本的心理欲求充足と動機づけとの関連

寺 菌 さおり

〔論文要旨〕

本研究では、自己決定理論に基づき、子育て期の母親を対象に育児行動に対する基本的心理欲求充足尺度と動機づけ尺度を作成し、これらの関連性について検討した。先行研究に従い、育児行動に対する基本的心理欲求充足尺度は、「自律性への欲求充足」、「有能感への欲求充足」、「関係性への欲求充足」の3つの下位尺度、育児行動に対する動機づけ尺度は、「無動機づけ」、「外的調整」、「取り入的調整」、「同一化調整」、「内的調整」の5つの下位尺度で構成された。ピアソンの相関係数を算出した結果、3つの基本的心理欲求充足と自己決定性の高い「内的調整」と「同一化的調整」との間に正の相関、非自己決定的な「無動機づけ」との間に負の相関を認めた。また、子育て期の母親の well-being の指標でもある育児に対する自己効力感尺度と育児行動に対する基本的心理欲求充足尺度との間に正の相関を認めた。以上のことから、乳幼児期の子どもをもつ母親の「自律性」、「有能感」、「関係性」への欲求が充足された時、育児に対する自己決定的な行動や well-being が高まる可能性が示唆された。

Key words : 子育て期の母親, 育児行動に対する基本的心理欲求充足, 育児行動に対する動機づけ, 自己決定理論

I. 諸 言

平成13年から開始された母子の健康水準を向上させるためのさまざまな取り組み「健やか親子21」の最終評価では、子育てに自信がもてない母親の割合は変わらず、子どもの年齢が上がるとともに母親は育児上の困難感も高まる傾向が示され¹⁾、「健やか親子21 (第2次)」でも引き続き、育児不安の軽減に向けた支援を課題としている¹⁾。

就学前の子どもをもつ母親の育児不安は幸福感を低下させる一方で、肯定的な育児感情は母親の幸福感を高めるとい²⁾。また、母親の親としての意識が高いと育児肯定感が高く²⁾、母親にとって望ましい育児を遂行することは、母親としての満足感を高める³⁾ことから、日常的に繰り返す必要のある育児行動の継続する要因を具体的に検討することは、育児不安の軽減や

家庭の教育力の低下などの問題を解決する糸口になると考える。

育児は母親の人格的成長というポジティブな側面だけではなく、母親としてのスキルや自信、満足感の側面にネガティブな影響を与えている⁴⁾。しかし、子育て期の母親は子育てのネガティブな側面を受け入れながら意味づけをし、母親として適応していくとい⁵⁾。またネガティブな体験が母親としての適応を促す契機になることが示唆されている^{6,7)}。母親の育児へ適応する能力の一つに「育児に対する自己効力感」⁸⁾がある。育児に対する自己効力感とは、育児で直面する経験的な、あるいは未経験な新しい状況に遭遇した際に臨機応変に対処できるという確信の程度であり、育児負担感の低減にも影響するという⁸⁾。このように母親が体験する育児行動とは、子どもとの関係性においてポジティブな体験を味わう一方でネガティブな体験を対

処しながら日常的に繰り返される子どもの世話といえる。以上より、母親は子育てのネガティブな体験でさえも臨機応変に対処し、その価値を認めながら育児行動を遂行していることから、母親は育児行動を継続するための動機づけを有していることが考えられる。

これまでの動機づけの研究では内発的動機づけと外発的動機づけは対立して捉えることが多かった。しかし、近年、RyanとDeciの自己決定理論では、主に社会的な価値を自分のものにしていく内在化に注目して、無動機づけ(=無気力状態)、外発的動機づけ(外的調整、取り入りの調整、同一化的調整、統合的調整)、内的調整という順で外発的動機づけと内発的動機づけを自律性(自己決定性)という次元上の連続体で捉えている⁹⁾。内在化の程度(理由づけのあり方)によって、自律性の程度が決定される¹⁰⁾。この理論によると、無動機づけとは、内在化がなされていない状態であること、外発的動機づけは内在化の程度によって、最も低く他律的な外的調整(外部からの強制によって行動する段階)、やや他律的な取り入りの調整(義務感や恥などを理由に行動する段階)、やや自律的な同一化的調整(個人的な重要性を理由に行動する段階)、自律的な統合的調整(自己の価値観と一致している状態)へと徐々に自律の程度が高くなり、最も自律的で興味や楽しさから行動できる内発的動機づけへと段階的に動機づけを捉えている¹⁰⁾。

これまでの主な動機づけ研究では、学習や仕事など社会的に価値が高いものが研究の対象で、育児に関連した動機づけの研究は少ない¹¹⁾。母親の育児行動は遂行しても必ず報酬があるわけではないが、日常的に継続する必要がある。このような育児行動に対して母親が自律的な動機づけをもつことができれば、日々の子育ての中での母親の自己評価は高まり、育児不安も軽減されるのではないだろうか。

動機づけが自律性を増していく過程は、自律性への欲求(自身の行動を自ら決定し、行動の起源でありたいという欲求)、有能感への欲求(活動を通して自分の能力を高めたいという欲求)、関係性への欲求(他者との間に温かい関係をもちたい欲求)という基本的欲求が満たされる時であるという¹⁰⁾。例えば、「育児をやりたいとは思わない」という無動機づけの母親に対して段階的に自律的動機づけへと変容するためにはどのような側面の心理的欲求を充足すればよいかというアセスメントの手がかりとなり得る。

そこで本研究では、乳幼児期の子どもをもつ母親の育児行動に対する自律的動機づけを支えるための基礎的な知見を得るために、基本的心理欲求充足尺度と動機づけ尺度を作成し、これらの関連を検討することを目的とした。

II. 方 法

1. 用語の定義

本研究の育児行動に対する基本的心理欲求充足と動機づけの定義は、RyanとDeci⁹⁾の自己決定理論の概念定義やRyanとDeci⁹⁾の概念を参考に作成した櫻井の動機づけのタイプ、自己調整のタイプを中心とした自己決定連続体のモデル¹⁰⁾を参考にした。なお、自己決定理論では外発的動機づけの中で最も自律性の高い調整スタイルとして統合的調整があるが、実証的研究では、統合的調整と内的調整は統計的に分別が困難なため、統合的調整は取り扱われていない¹²⁾。本研究においても統合的調整については取り扱わないこととした。

1) 育児行動

子どもとの関係性においてポジティブな体験を味わう一方でネガティブな体験を対処しながら日常的に繰り返される子どもの世話。

2) 母親の育児行動に対する基本的心理欲求充足

自律性への欲求充足：母親が自分自身の考えや思いで育児をしていると認識し、「自分らしく」育児を継続している状態。

有能感への欲求充足：母親が自分自身の育児を認めたり、他者に認められたりする中で育児に対する自信を得ている状態。

関係性への欲求充足：子育てコミュニティの中で、母親が周囲とのつながりを実感し、安心している状態。

3) 母親の育児行動に対する動機づけ

無動機づけ：子どもを育てることに対する自らの意味をもたない状態で育児を継続する動機づけ(育児を継続していない場合もある)。

外的調整：子どもを育てることに対する自らの意味をもたない状態で、周囲からの強制により育児を継続しようとする動機づけ。

取り入りの調整：子どもを育てることに対する自らの意味もっているが、母親自身の名誉や羞恥心から育児を継続しようとする動機づけ。

同一化的調整：子どもを育てることに積極的な意味をもちながら育児を継続する動機づけ。

内的調整：日々の育児の中で生じる葛藤を抱くこともあるが、子どもを育てることの楽しさやおもしろさから育児を継続する動機づけ。

母親の育児行動に対する自律的な動機づけ：母親が子どもを育てることに自らの意味を見出した状態で育児を継続しようとする動機づけ。

2. 質問項目の作成過程

1) 質問項目の抽出

質問項目の作成にあたり、RyanとDeci⁹⁾の自己決定理論の概念定義を参考にした。母親の「育児行動に対する基本的心理欲求充足」尺度の質問項目は、RyanとDeci¹³⁾の“The Basic Need Satisfaction in Life Scale”21項目を日本語に翻訳した大久保ら¹⁴⁾の心理的欲求充足尺度の項目を参考に20項目からなる仮尺度を作成した。母親の「育児行動に対する動機づけ」尺度は、RyanとDeci⁹⁾の概念を参考にして作成された櫻井の動機づけのタイプ、自己調整のタイプを中心とした自己決定連続体のモデル¹⁰⁾や自己決定理論に基づいて作成された西村ら¹²⁾の自律的学習動機尺度を参考に20項目からなる仮尺度を作成した。そして、発達心理学を専門とする研究者と、項目が定義に沿っているか、類似した内容はないか、を確認した。

2) 面談による質問項目の検討

同意の得られた乳幼児をもつ20代から40代の母親3人と、乳幼児の育児経験者として、小学生の子どもを育てる40代の母親2人を対象に、質問項目を確認するために面談を実施した。確認事項は、作成した質問項目が乳幼児の子どもを育てる母親にとってわかりづらい表現はないか、不快な表現がないか、であった。

3) 質問項目（原案）の作成

以上の手続きを経て、最終的に母親の「育児行動に対する動機づけ」尺度は20項目、母親の「育児行動に対する基本的心理欲求充足」尺度は20項目から構成される仮尺度を作成した。

3. 質問紙調査の実施

1) 調査対象者と調査方法

A市立保育所7園に調査協力を依頼し、園ごとにクラス担任が保護者に質問紙を配布し、家庭で記入後、無記名で封をしてそれぞれの園に提出してもらったものを回収した（配布数649部）。質問紙に、回答は統計的に処理されること、調査は強制ではないことを明記

した。これらの調査は2017年9月中に実施した。

2) 調査内容

i. フェイスシート

母親の年齢、職業形態、家族形態、子どもに関する情報として、子どもの年齢、出生順位、性別、通園（学）状況の記入を求めた。

ii. 育児行動に対する基本的心理欲求充足尺度

先の過程で作成した20項目から構成した。下位尺度項目として、自律性への欲求充足（6項目）、有能感への欲求充足（6項目）、関係性への欲求充足（8項目）で測定された。教示は「あなたの日々の“育児”について、最も当てはまる数字を1つだけ○で囲んでください」とし、「1：そう思わない」、「2：あまりそう思わない」、「3：どちらともいえない」、「4：まあそう思う」、「5：そう思う」の5件法により回答を求めた。

iii. 育児に対する自己効力感尺度

金岡⁸⁾が作成した「育児に対する自己効力感尺度」（13項目）を使用した。この尺度は母親が育児で直面する経験的なあるいは未経験な新しい状況に遭遇した際に臨機応変に対処できるという確信の程度を測定するものである。教示は「あなたご自身の子育てについて、最も当てはまる数字を1つだけ○で囲んでください」とし、「1：そう思わない」、「2：あまりそう思わない」、「3：どちらともいえない」、「4：まあそう思う」、「5：そう思う」の5件法により回答を求めた。

iv. 育児行動に対する動機づけ尺度

先の過程で作成した20項目から構成した。動機づけスタイルがそれぞれ4項目で測定された。教示は「あなたの日々の“育児をする理由”について、最も当てはまる数字を1つだけ○で囲んでください」とし、「1：そう思わない」、「2：あまりそう思わない」、「3：どちらともいえない」、「4：まあそう思う」、「5：そう思う」の5件法により回答を求めた。

3) 倫理的配慮

面談の調査対象者とA市役所の担当者に調査の主旨および質問紙の内容を説明し、承諾を得た。質問紙の調査対象者へは書面で研究の主旨、自由意思による参加、不利益からの保護、プライバシーの保護、結果の公表等を説明し、質問紙の提出をもって同意が得られたものと判断することについても明記した。なお、研究にあたって埼玉大学におけるヒトを対象とする研究に関する倫理委員会の審査を受け、承認を得た（承認番号H29-E-10）。

4. 分析方法

尺度作成と母親の育児行動に対する基本的心理欲求充足と動機づけとの関連については、以下の統計的手続きにより行った。

1) 因子分析

因子の抽出を行うために、因子数は自己決定理論の概念に従い、「母親の育児行動に対する基本的心理欲求充足」20項目について3因子、「母親の育児行動に対する動機づけ」20項目について5因子を指定して因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。

2) 因子項目の確定と命名

因子分析の結果からの項目の選択作業として、各因子において因子負荷量の絶対値が0.4未満だった項目と複数の因子に高い因子負荷量をもつ項目を削除して繰り返し因子分析を行い、因子項目を確定した。また、その項目の内容から下位尺度を命名した。

3) 母親の育児行動に対する基本的心理欲求尺度の下位尺度の妥当性の検討

金岡⁸⁾が作成した育児に対する自己効力感尺度は自己のコントロール感や自己表現、対人関係を築く意志などの内容が含まれていることから well-being の指標となり、基本的心理欲求と正の相関が予想される。そこで、基本的心理欲求尺度の下位尺度ごとの平均得点と、育児に対する自己効力感尺度の平均得点との間でピアソンの相関係数を求め、妥当性を検討した。

4) 母親の育児行動に対する動機づけ尺度の下位尺度間の関連性の確認

自己決定理論では、「外的調整」、「取り入れ的調整」、「同一化的調整」、「内的調整」のそれぞれの動機づけが、自律性の観点から次元の連続体状に並ぶものと考えられている⁹⁾。それぞれの下位尺度の平均得点をもとにピアソンの相関係数を算出した。概念的に近い位置関係にある動機づけ間には正の相関があり、遠い位置関係にある動機づけの間には負の相関もしくは無相関になるというシンプレックス構造⁹⁾を確認し、構成概念の妥当性を検討した。

5) 尺度項目の信頼性の確認

最終的に得られた項目について、同一因子内の項目の内的整合性を確認するために Cronbach の α 係数を算出した。

6) 育児行動に対する基本的心理欲求充足と動機づけとの関連

育児行動に対する基本的心理欲求充足と動機づけとの関連を検討するために、各下位尺度の平均得点を算出し、ピアソンの相関係数を求めた。

なお、分析には統計解析ソフト IBM SPSS Statistics22を使用した。

Ⅲ. 結 果

1. 調査対象者の属性

乳幼児の子どもをもつ母親329人の属性は表1に示すとおりである。母親の年齢は約7割が30代であった。子どもを有する数は1人が36%、2人が40%、3人以上が14%であった。母親の就業形態は、約6割がフルタイム、約3割がパートタイムであった。家族形態は約8割が核家族であった。

2. 母親の育児行動に対する基本的心理欲求充足尺度の作成

因子分析の結果、最終的には自律性への欲求充足4項目、有能感への欲求充足5項目、関係性への欲求充足6項目の計15項目を採用した。第1因子には「自分

表1 調査対象者の属性

母親年齢	人数 (人)	(%)
20～25歳未満	3	1
25～30歳未満	12	4
30～35歳未満	118	36
35～40歳未満	106	32
40～45歳未満	57	17
45歳以上	6	2
無回答	27	8
母親の職業形態	人数	(%)
フルタイム	204	62
パートタイム	93	28
専業主婦	4	1
無回答	28	9
家族形態	人数	(%)
核家族	277	84
大家族	8	2
母子	9	3
無回答	35	11
子どもの人数	人数	(%)
1人	120	36
2人	131	40
3人以上	46	14
無回答	32	10

表2 育児行動に対する基本的心理欲求充足尺度の因子分析の結果 (主因子法・プロマックス回転後)

	因子		
	1	2	3
1. 自律性への欲求充足 ($\alpha = .76$)			
自分で決めた方法で子育てをしていると思う	.722	.121	-.027
育児の方法は自分で自由に決めていると思う	.677	-.119	-.178
日々の生活において、私は育児についての意見や考えを自由に表現できると思う	.603	-.007	.104
自分らしく子育てをしていると思う	.532	.281	.053
2. 有能感への欲求充足 ($\alpha = .87$)			
私は日々の子育てで自信を得ていると思う	-.064	.909	-.010
私は日々の育児で達成感を感じている	-.094	.898	.026
私はうまく子育てをしていると思う	.065	.775	-.053
私は日々の子育てで自分の得意なことを発揮する機会があると思う	.003	.630	-.048
周りの人が私の育児を認めてくれていると思う	.121	.535	.161
3. 関係性への欲求充足 ($\alpha = .84$)			
育児で悩んだ時に、励ましてくれる人がいると思う	.087	-.171	.876
育児で相談できる人がいると思う	.100	-.115	.767
周囲の人と信頼関係を築いていると思う	-.059	.100	.686
周囲の人から親切にされていると感じている	-.085	.091	.660
保護者の中に心を許せる人がいると思う	-.091	.032	.632
保護者同士、うまくやっていると思う	-.115	.089	.589
因子間相関			
	1	.580	.403
	2		.373

で決めた方法で子育てしていると思う」などの項目が高い負荷を示し、「自律性への欲求充足」とした。第2因子には「私は日々の子育てで自信を得ていると思う」などの項目が高い負荷を示し、「有能感への欲求充足」とした。第3因子には「育児で悩んだ時に、励ましてくれる人がいると思う」などの項目が高い負荷を示し、「関係性への欲求充足」とした(表2)。

次に基本的心理欲求充足尺度の下位尺度と育児に対する自己効力感尺度との間のピアソンの相関係数を求めた(表3)。その結果、「自律性への欲求充足」、「有能感への欲求充足」、「関係性への欲求充足」との間には有意な正の相関が確認された。

3. 母親の育児行動に対する動機づけ尺度の作成

因子分析の結果、最終的に各下位尺度3項目、計15項目を採用した。第1因子には「子育ては大変だけれどもおもしろいから」などの項目が高い負荷を示し、「内的調整」とした。第2因子には「子育ては自分のためになるから」などの項目が高い負荷を示し、「同一化的調整」とした。第3因子には「周りの人にかっこいい親と思われたいから」などの項目が高い負荷を

表3 育児行動に対する基本的心理欲求充足尺度と育児に対する自己効力感尺度との相関

	自律性への 欲求充足	有能感への 欲求充足	関係性への 欲求充足
育児に対する自己効力感	.496**	.562**	.556**
自律性への欲求充足		.525**	.297**
有能感への欲求充足			.317**

** $p < .01$

示し、「取り入れ的調整」とした。第4因子には「育児をしなければいけないと思うから」などの項目が高い負荷を示し、「外的調整」とした。第5因子には「育児は時間を無駄にしている気がする」などの項目が高い負荷を示し、「無動機づけ」とした(表4)。表5に示すように、下位尺度間の相関係数を算出した結果、概念的に近い動機づけの間には正の相関が確認され、概念上、遠い動機づけほど負の相関もしくは無相関になるというシンプレックス構造⁹⁾が確認された(表5)。

4. 母親の育児行動に対する基本的心理欲求充足と動機づけとの関連

育児行動に対する基本的心理欲求充足と動機づけと

表4 育児行動に対する動機づけ尺度の因子分析の結果 (主因子法・プロマックス回転)

項目	1	2	3	4	5	
1. 内的調整 ($\alpha = .83$)						
子育ては大変だけれどもおもしろいから	.902	.027	-.042	.042	.117	
子育ては大変だけれども楽しいから	.779	.012	.011	-.063	-.034	
子育ては大変だけれども子どもを育てることが好きだから	.668	.033	.072	-.082	-.023	
2. 同一化的調整 ($\alpha = .70$)						
子育ては自分のためになるから	-.010	.794	.071	-.185	.098	
子どもを育てることで、自分が成長すると思うから	.000	.686	-.027	.079	-.101	
子育ては自分にとって意義があると思うから	.170	.406	-.061	.267	-.128	
3. 取り入れ的調整 ($\alpha = .75$)						
周りの人にかっこいい親と思われたいから	-.007	.075	.850	-.163	.020	
他の親よりよい子育てをしたいと思うから	-.061	-.015	.625	.128	.014	
周りの人によい親だと思われたいから	.102	-.077	.590	.243	-.059	
4. 外的調整 ($\alpha = .62$)						
育児をしなければいけないと思うから	-.034	.005	-.039	.601	-.007	
子育てはきまりみたいなものだから	-.179	-.019	.145	.489	.071	
みんなが当たり前のように子育てしているから	.071	.039	.237	.486	.034	
5. 無動機づけ ($\alpha = .79$)						
育児は時間を無駄にしている気がする	.216	-.091	-.013	.021	.847	
育児をしたいと思わない	-.154	.125	-.116	.191	.710	
育児をする理由がわからない	-.114	-.045	.109	-.123	.644	
因子間相関						
	1	1.000	.542	.073	-.318	-.551
	2		1.000	.107	.004	-.317
	3			1.000	.432	.188
	4				1.000	.392

表5 育児行動に対する動機づけ尺度の下位尺度間の相関

	同一化的調整	取り入れ的調整	外的調整	無動機づけ
内的調整	.471**	.043	-.270**	-.471**
同一化的調整		.088	-.003	-.292**
取り入れ的調整			.437**	.167**
外的調整				.353**

** $p < .01$

表6 育児行動に対する基本的心理欲求充足尺度と動機づけの下位尺度間の相関

	内的調整	同一化的調整	取り入れ的調整	外的調整	無動機づけ
自律性への欲求充足	.316**	.218**	-.081	-.192**	-.212**
有能感への欲求充足	.401**	.270**	.076	-.186**	-.240**
関係性への欲求充足	.320**	.295**	.047	-.038	-.149**

** $p < .01$

の間のピアソンの相関係数を求めた結果、「自律性への欲求充足」は「内的調整」と「同一化的調整」との間には有意な正の相関、「外的調整」と「無動機づけ」との間には有意な負の相関が確認された。「有能感への欲求充足」は「内的調整」と「同一化的調整」の間には有意な正の相関、「外的調整」と「無動機づけ」の間には有意な負の相関が確認された。「関係性への欲求充足」は「内的調整」と「同一化的調整」との間

には有意な正の相関、「無動機づけ」の間には有意な負の相関が確認された(表6)。

IV. 考 察

1. 母親の育児行動に対する基本的心理欲求充足尺度の信頼性と妥当性

因子分析の結果、母親の育児行動に対する基本的心理欲求の充足について、「自律性への欲求充足」、「有

能感への欲求充足, 「関係性への欲求充足」の3因子が確認され, 各項目の因子負荷量も十分な値を示していた。また, 3つの尺度のCronbachの α 係数はいずれも高い値を示した。さらに金岡⁸⁾の育児に対する自己効力感尺度との間に有意な正の相関が認められ, これらの質問項目の妥当性が確認された。乳幼児をもつ母親において, 育児に対する自己効力感は育児負担感を軽減する要因の一つであり, 育児に対する自己効力感向上の支援の必要性が示唆されている⁸⁾。今回, 育児に対する自己効力感尺度と育児行動に対する基本的心理欲求尺度で正の相関を認めた。このことは, 育児に対する自己効力感を高めるには, 母親の育児行動に対する有能感, 関係性, 自律性それぞれの欲求の充足状況に応じた支援が必要であることが考えられ, 本尺度はその欲求の充足状況を把握するアセスメントツールとして可能と思われる。

2. 母親の育児行動に対する動機づけ尺度の因子構造と信頼性と妥当性

因子分析の結果, 母親の育児行動に対する動機づけについて「内的調整」, 「同一化的調整」, 「取り入れ的調整」, 「外的調整」, 「無動機づけ」の5因子が確認され, 各項目の因子負荷量も十分な値を示していた。5つの尺度のCronbachの α 係数は一部, 外的調整において $\alpha = .62$ とやや低かったが, その他の下位尺度については $\alpha = .83 \sim .70$ と信頼性が確認された。下位尺度間の相関係数を算出した結果, 概念的に近い動機づけの間には正の相関, 概念上, 遠い動機づけほど負の相関もしくは無相関になるというシンプレックス構造⁹⁾も確認され, 構成概念の妥当性を備えた尺度が作成された。

3. 母親の育児行動に対する動機づけと基本的心理欲求充足との関連

育児行動に対する3つの基本的心理欲求充足の各下位尺度と動機づけとの間の相関係数を算出した結果, 自律性の高い「内的調整」と「同一化的調整」との間に正の相関が示された。また, 本研究では, 育児行動に対する基本的心理欲求充足尺度と子育て期の母親のwell-beingの指標でもある育児に対する自己効力感尺度との間に正の相関を認めた。このことから, 乳幼児期の子どもをもつ母親の「自律性」, 「有能感」, 「関係性」への欲求が充足された時, 育児に対する自己決定

的な行動やwell-beingが高まる可能性が示唆された。

一方, 非自己決定的な「無動機づけ」との間に負の相関が示され, 3つの基本的心理欲求が充足されていないと, 非自己決定的な動機づけで育児が遂行される可能性も示唆された。このことは, 母親の基本的心理欲求が充足されていないと, 「育児をしたいとは思わない」といった非自己決定的な動機づけにより, 不適切な育児でもある虐待を引き起こす可能性も考えられた。

自己決定理論では, 外発的動機づけと内発的動機づけを自律性(自己決定性)という一次元上の連続体で捉えている^{9,10)}。本研究でも育児行動に対する動機づけは, 「無動機づけ」, 「外的調整」, 「取り入れ的調整」, 「同一化的調整」, 「内的調整」という一次元上の連続体として捉えられた。また, 3つの基本的心理欲求と自律的な動機づけと正の相関, そして無動機づけと負の相関が確認されたことから, 3つの基本的心理欲求の充足が母親の自律的動機づけの内化プロセスにおいて重要な要因となっていることが考えられる。このことは, 無動機づけの母親に対して段階的に自律的な動機づけへと変容するにはどの側面の育児行動に対する基本的心理欲求を充足すればよいかというアセスメントの手がかりとなると考えられる。今後は母親の育児行動と動機づけの構造を明らかにし, 母親の育児行動に対する動機づけの内化プロセスへの支援として基本的心理欲求を検討していく必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。また, 研究のご助言をいただきました鳴門教育大学の浜崎隆司先生に深く感謝いたします。

本研究は平成29年度科学研究費助成事業(基盤研究(C))(課題番号:17K01889)の助成を受けて実施した。

本論文の一部は, 日本発達心理学会第29回大会で発表した。

利益相反に反する開示事項はありません。

文 献

- 1) 厚生労働省. “健やか親子21(第2次)” <http://sukoyaka21.jp/> (参照2017-07-09)
- 2) 熊野道子. 乳幼児を持つ親の育児感情と自分の役割配分と幸福感の関連. *Journal of Health Psychology Research* 2017; 29: 45-52.

- 3) 寺菌さおり, 山口桂子. 子育て期母親役割尺度の作成. 小児保健研究 2015 ; 74 : 491-497.
- 4) 柏木恵子, 若松素子. 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究 1994 ; 5 : 72-83.
- 5) 徳田治子. ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ: 生涯発達の視点から. 発達心理学研究 2004 ; 15 : 13-26.
- 6) 菅野幸恵. 母親が子どもをイヤになること: 育児における不快感情とそれに対する説明づけ. 発達心理学研究 2001 ; 12 : 12-23.
- 7) 坂上裕子. 歩行開始期における母子の共発達: 子どもの反抗・自己主張への母親の適応過程の検討. 発達心理学研究 2003 ; 14 : 257-271.
- 8) 金岡 緑. 育児に対する自己効力感尺度 (Parenting Self-efficacy Scale : PSE 尺度) の開発とその信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究 2011 ; 70 : 27-38.
- 9) Ryan RM, Deci EL. Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. American Psychologist 2000 ; 55 : 68-78.
- 10) 櫻井茂男. 自ら学ぶ意欲の心理学—キャリア発達の視点を加えて— 東京: 有斐閣, 2009.
- 11) 速水敏彦. 感情的動機づけ理論の展開—やる気の素顔—. 京都: ナカニシヤ出版, 2012 : 125-144.
- 12) 西村多久磨, 河村茂雄, 櫻井茂男. 自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス—内発的な学習動機づけは学業成績を予測することができるのか?—. 教育心理学研究 2011 ; 59 : 77-87.
- 13) Ryan RM, Deci EL. The Basic Need Satisfaction in Life Scale. Unpublished Manuscript, University of Rochester, Rochester, NY, 2000.
- 14) 大久保智生, 長沼君主, 青柳 肇. 学校環境におけ

る心理的欲求の充足と適応感との関連. ヒューマンサイエンスリサーチ 2003 ; 12 : 21-28.

〔Summary〕

In this research, the basic psychological needs satisfaction scale and motivation scale for child-care behavior was developed in the self-determination theory and their relevance was examined. Following previous studies, the basic psychological needs satisfaction scale for child-care behavior was composed three subscales : “need satisfaction for autonomy,” “need satisfaction for competence,” “need satisfaction for relatedness.” The motivation scale for child-care behavior was composed five subscales: “amotivation,” “external,” “internalized,” “identified,” “intrinsic.” Pearson’s correlation was performed on each data set. There were positive correlations between three basic psychological needs satisfaction and the high determination (“identified,” “intrinsic”). On the other hand, there were negative correlations between three basic psychological needs and low self-determination (“amotivation”). In addition, there were positive correlations between “Parenting Self-efficacy Scale” and three basic psychological needs satisfaction for child-care behavior.

These results showed that satisfying three basic psychological needs (“autonomy,” “competence,” “relatedness”) might have facilitated the mothers’ self-determination and well-being in the child-care.

〔Key words〕

mothers in the childcare period, basic psychological needs satisfaction for child-care behavior, motivation for child-care behavior, self-determination theory